

## 日本近代西洋医学の夜明け（英医ウィリアム・ウィリス）

佐藤 八郎

元鹿児島大学医学部長・鹿児島大学第二内科学教室教授

### At Dawn of Modern Western Medicine in Japan, a British Medical Doctor, William Willis

Hachiro SATO, M. D.

Past Dean, Emeritus Professor, Faculty of Medicine,  
Kagoshima University, Kagoshima (The Deceased)

幕末から近代日本の夜明けにかけて医学の分野で活躍した英国人医師ウィリアム・ウィリス（William Willis 1837～1894）は、わが国の医学界にとって忘れることのできない恩人である。しかし現在ウィリスの名を知る者は非常に少ないように思われる。わが国の医学の歴史を繙くとき、ウィリスが如何に重要な位置にあったか、その意義はまことに深いものがある。もし合理的医学教育を志向する英国流の医学教育体系がわが国に取り入れられていたならば、その基盤をドイツ医学におくわが国の体系がより合理的な方向へ育ってきていたかもしれないからである。

昭和43年4月鹿児島大学医学部の25周年記念式典を行った際、鹿児島西洋医学開講百年記念式典を挙行し、ウィリスの孫2人とその叔母さんと呼び、英国大使代理マンダース夫妻、文部大臣代理福田得志鹿児島大学長、武見太郎日本医師会長、小川鼎三医史学会長、ウィリス研究者鮫島近二博士、ウィリスの高弟高木兼寛の孫・樋口一成慈恵医大学長はじめ医師会・医学会関係者多数列席して、ウィリスの徳をたたえ、その際ウィリスの記念レリーフの除幕を行い、更に拙著『英医ウィリアム・ウィリス略伝』を配付して、わが国近代医学の功労者を知って貰おうとしたのであった。

最近ウィリスについて萩原延寿氏による朝日新聞連載の「遠い崖」や前駐日英大使サー・ヒュー・コータッチの「ある英人医師の幕末維新」（英文と日本語）が出ている。

ウィリスは1837年（天保8年）5月1日北アイルランドのCo. Fermanagh（ファーマーナー州）Enniskillen 郊外のMaguiresbridgeに生まれた。

ウィリスがグラスゴーおよびエジンバラ大学で医学を修め、エジンバラ大学を卒業した1859年（安政6年）の頃は、ちょうどわが国ではペリー、ハリスの来航によってもたらされた横浜開港の年であった。医学部卒業後、ロンドンのMiddlesex 病院でSenior Clinical Assistantとして1年半程勤務し、1861年（文久元年）11月駐日英国公使館及び領事館付医官を命ぜられ、1862年（文久2年）になって上海経由、5月12日に長崎に到着来日した。時に弱冠25歳であった。

当時の英国公使オールコックは賜暇帰英中で、公使代理はニール中佐で、まもなくパークス公使にかわった。文久の頃といえば、わが国は風雲急を上げるときで、安政の大獄をきっかけに、鎖国から開国へ、幕府の崩壊から明治の新政府へと世は移り変わってゆくのである。

一方、当時のスコットランド医学は隆盛をきわめており、多くの卓越した医学者が輩出した。James Symeは麻酔使用の開拓者であり、産科学のJames Young Simpsonは1846年エーテル麻酔を、さらに1年後クロロホルム麻酔を導入した。Symeの助手Joseph Listerは、1857年すでに“The Early Stages of Inflammation”という論文を発表したが、石炭酸を用いての消毒法を開拓したのは、実にListerその人であった。これらの傑出した医学者を生み出した土壌と歴史の中で、ウィリスは医師としての心と技術を身につけたのである。彼の学位論文“Theory of Ulceration”（1859年）の中に、外科医としてばかりでなく医学者としての素質を随所にみることができる。

わが国へ初めて来航した公的な英国使節は、おそらく1858年（安政5年）のLord Elgin Missionであり、1859年（安政6年）オールコックによって江戸高輪の東禅寺に公使館がおかれた。その後、文久1年および2年に、それぞれ第一及び第二東禅寺事件がおり、ウィリスはわが国で初めての苦難をなめることになる。さらに、1862年（文久2年）8月生麦事件が発生した。

攘夷のあらしが吹きあれて、テロ事件が往行していた頃である。英国商人Charles Richardson一行四人は、神奈川

の街道を東海道の風景を愛でながら馬をすすめ、秋の行楽を楽しんでいた。生麦にさしかかったとき、島津久光の行列に無礼があったとして事件が突発した。結局 Richardson は殺され、同行の Marshall と Clark は負傷した。半狂人のようになった Mrs. Borrodaile の通報により、真先に駆けつけて負傷者の治療や検屍に当たったのがウィリスである。

その後ウィリスの関係する戦争は多いが、中でも薩英戦争 [1863年 (文久3年)] とわが国における史上最大の内乱といわれる戊辰戦争 [1868年 (慶応4年)] をあげねばならない。

生麦事件で英国公使は幕府へ嚴重に抗議したが、要領を得ないので、直接鹿児島と談判する外ないとして軍艦をさしむけた。時に1863年 (文久3年) 7月中旬、キューパー中将は英艦7隻、旗艦ユーリアラス号で下手下引渡しと賠償金2万5千ポンドを請求したが、薩摩はこれを拒絶したので、遂に砲火を相交えた。これが薩英戦争である。薩摩は英国のアームストロング砲やロケット弾 (火箭) のため大打撃を受けたが、英国方は旗艦の艦長・副艦長及び9名の水兵が戦死し、戦意を失い、錨を薩摩方にとられて心ならずも英艦は逃げ去った。この戦争でウィリスはアーガス号に搭乗し鹿児島湾に従軍した。この薩英戦争により泰西文明の威力を知り攘夷が不可能であること悟った薩摩は、英国と和を結んで親善関係になった。そして1865年 (元治2年) 3月22日、薩摩は英国へ19名の留学生を出すことになった。その中には、後に日本の近代化に貢献した五代才助 (友厚・後の大阪商工会議所初代会頭)、松木弘安 (寺島宗則、後の外務大臣)、鯨島尚信 (後のフランス大使)、森有礼 (後の文部大臣)、後にアメリカに渡り葡萄牙王となった磯永彦輔らも含まれていた。

1868年 (慶応4年) 1月3日、鳥羽伏見で薩長兵と会津・桑名兵との間に戦端が開かれた。この鳥羽伏見の戦争に薩藩の依頼で、1月27日ウィリスは、親友のアーネスト・サトウと共に入洛し、相国寺境内の養源院に設けられていた薩藩病院にて治療に従事した。彼の合理的な治療によって多くの将兵の生命が救われ、西洋外科のすぐれていることが認められた。ウィリスに対する信頼は次第に篤くなり、名声を博したのである。この時、薩摩の石神良策、上村泉三、山下広平らが助手として働き、西郷従道も彼の手当を受けて九死に一生を得た。これがわが医学界の檜舞台に登場する契機となり、また後年西郷隆盛と親交を結ぶ機縁ともなった。ウィリスは京都滞在中、山内容堂の重病を治癒せしめ、また2月晦日パークスが宿舎の智恩院より参内の途次、2人の凶漢に襲われ12人の負傷者を出したが、随行のウィリスが手当して大いに功績を挙げた。間もなくウィリスは、4月13日横浜に軍陣病院 (仮病院、横浜病院、養生所、修文館、野戦病院、天朝病院等の異名あり) が開設されると、招聘され、房総戦争、上野彰義隊の変等の官軍方の負傷兵を治療した。中村半次郎 (後の桐野利秋)、益満休之助 (西郷と勝の会見の仲だちをした) 等の多くの薩摩兵は治療を受けたが、益満は化膿のため死亡した。

同病院は同年7月20日東京下谷御徒町・藤堂邸に移転し、英医シドルが治療に当ることになって、ウィリスは明治新政府の乞いによりパークスの斡旋で東北戦争に従事することになった。8月15日横浜から越後に向かうことになった。碓井峠を経て高田へ入る関川の番所では、通過を拒絶する番人を「自分は一外国人としてでなく日本天皇の勅命によって通過するものだ」と、大喝一声怒鳴りつける史実など、ウィリスの気概を見る思いである。高田を経て柏崎、新潟、新発田そして会津に転戦、各地で赤十字精神を発揮して敵味方なく負傷者の治療に当たった。

彼の手記によれば、ウィリスは自ら600人の負傷者の治療に当たった。約1,000人の患者治療について処方を書いた。これらの負傷者のうち官軍の者が900人、会津藩兵が700人であった。小指の除去の手術から大腿骨の関節の切断等大小手術38回、23個の銃弾の摘出、200人以上の患者の腐骨切除、鉄の副木の使用など西洋医学の面目を発揮したのであった。かくしてウィリスは戦功をたてて12月25日 (新暦) 約3ヶ月振りに帰京した。

内乱は新政府の勝利のうちに終りをつけ、慶応4年9月8日 (新暦10月23日) を改めて明治元年とし、10月天皇は初めて京都から東京へ移られ、翌2年 (1869) 3月東京が首都と定められて明治の新政府が始まった。

ウィリスは、同年3月2日シドルに代り、下谷御徒町より神田和泉町に移転した東京医学校兼大病院を主宰した。この東京医学校兼大病院は東京大学医学部の前身である。ウィリスはこの病院で市井の患者を診療し、また学生に講義してクロロホルム麻酔法、四肢切断術を行って、わが国外科学の発展に貢献すること大であった。東京医学校での当時の門下生には、明治初期の医学界の指導者となった石黒忠恵、池田謙齋、佐々木東洋などがいた。講義録の『日講紀聞』や薬に関する薬範等を出している。

【日講紀聞】は、エジンバラ大学 Syme 教授の外科教科書を参考にして自験例をまじえて講義したものであるようだ。この入院患者の大部分は薩摩の傷病兵であったが、仲々手に負えない乱暴者が多く看護人を殴打するものもあったので、試みに女の看護人をして看護せしめたところ患者も従順になった。これがわが国看護婦のはじまりである。その頃、ウィリスは日本でおそらく初めて緑内障患者に虹彩切除を施している。

ウィリスは医学教育機関と総合病院の基盤をつくりわが国の近代医学の開拓につくしたが、わが国の方針が英国医学

からドイツ医学へと一変したため、その犠牲となって在任わずか9ヶ月でその職を辞さねばならなかった。当時、政府は医学学制の一大改革を行うため、明治2年正月佐賀藩士相良知安、福井藩士岩佐純を医事取調御用掛とした。彼等は長崎でポンペ、ボードインらに学んだ蘭方医であった。

徳川時代に全盛を極めていたオランダ医学もその内容は、ドイツ医学の翻訳にすぎないので、識者は将来日本の医学は、範をドイツにとらなければならないと感じていた。相良知安はドイツから医学教師を招聘しなければならぬことを鋭意政府に建言したのである。相良の意見に賛成する者も少なくなかったが、何分ウィリスが現職にあるので、これを罷免しなければならぬという厄介な問題が横たわっていたので行き悩んでいた。ウィリスは英国公使パークスの後援があつて要路の大官とも交際して勢力があつたのみならず、当時の文部大臣ともいうべき知学事・山内容堂とも親善の間柄であつて、容堂が非常に反対したので、この問題の解決は一層困難となった。そこで相良はかつての恩師で当時大学南校の教頭フルベッキを訪うて、ドイツ医学こそ世界に冠たるものであるとの証言を得て、これを書類に書いて貰つて、要路の大官を説得した。相良の同郷の先輩である副島、大隈も卒先これに賛成し、その他の大官連も賛成して廟議は決定したのである。その背景にプロシアの君主体制にひかれた要因のあつたことも否めない。長い間、漢方医学の土壌の中で育ってきたわが国は、明治維新という怒濤のなかで、医学の流れはオランダ医学から英国医学への激しい渦をまきながら急転しつつあつた時、さらにドイツ医学へと急回転してしまつたのである。

ウィリスの解雇については相良も大いに困り、ウィリスが西郷隆盛と戊辰の役以来大変懇意である事を知っていたので、相良は西郷を訪ねてウィリスの後始末を依頼した。西郷は快諾して大久保甲東と相談の上、4年の契約で月俸900弗で鹿児島に傭入れることにした。当時の太政大臣（総理大臣）が月800円で、明治初頭の1ドルはだいたい1円（日銀調べ）にあたり、日本最高の月給取りとして鹿児島入りしたわけである。

ウィリスは1868年（明治元年）江戸駐在の英国副領事に任命されていたが日本新政府の前記の東京医学校兼大病院への雇用の要請に際し英政府からは、1年間の賜暇を与えられたウィリスは同医学校兼大病院で英国医学の手腕を発揮しようとしている矢先へ日本政府はドイツ医学を範とすることにしたのでウィリスは志半ばに夢破れて、鹿児島からの要請もあり鹿児島で病院を指導し医学を教えるために公使館の職を辞任した。

明治2年12月3日（1870年1月8日）ウィリスは石神良策、門人林ト庵とともに東京から鹿児島へ赴任してきた。33歳であつた。

ウィリスは現在、南州神社のある区域の浄光明寺跡に医学校を建て滑川のほとりに煉瓦で赤倉病院（約30人収容）を建て、医学校長兼病院長となった。早速、活動を開始し、ウィリス指導下の病院は明治3年4月から入院患者を受入れた。

ウィリスの職務は医学教育の各分野を理論と実践の両面にわたって教授すること、さらに医学生徒に対し、普通教育たとえば英語の正字法、読解、作文、会話、文法、算術、幾何などを教えることである。午前6時から平均12時間働いた。午前を診療、午後を講義にした。鹿児島医学校の制度は本科と別科に分かれて、本科（原語科）は4年で正科として英語を教え原書で講義した。別科（訳語科、簡易科）は2年で多くは医者の子弟に実地研修、調剤等を教え、高木兼寛、三田村忠国（故三田村篤志郎東大教授の父）等が教授していた。ウィリスが赤倉病院で英国流の man to man のベッドサイド・ティーチングで医学生教育をしたことは特筆に値しよう。

当時ウィリスの学徳を慕って遠く会津、静岡、和歌山地方から入学したものもあつた。廃藩置県後には鹿児島県下の生徒300名を下らず、他県より入学した者も合わすと5~600名にも達し、校運日に盛んであつた。鹿児島時代の門下生で後年名をなしたのに高木兼寛、河村豊州、三田村忠国、藤田圭甫、加賀美光賢、石神良策らがいる。当時の医学生には医学修業が目的でなく英語の勉強のため入学した人もかなりあつて、後年他の方面で名を挙げた人もあつた。現在の東京慈恵会医科大学はウィリス門下の高木兼寛男爵が創立した医学教育機関で、ウィリスの流れを汲んでいるものといえると思う。

ウィリスは、解剖には自分が持ってきた骸骨によって或いは牛・豚・鷲鳥等を用い、また人体模型や顕微鏡等を使つていたそうである。鹿児島医学校時代の『日講紀聞』をみるに外科、内科、産婦人科、耳鼻科、眼科等全科の講義をしている。特に外科が得意であつて赤の人参を山葵卸で卸して患部を巻いて繃帯するのが普通であつた。従来の医師は止血法を知らないで成績が悪かつたが、ウィリスは結紮やゴム管をはめて止血法を講じたので治療成績が甚だ良かつたのである。患者の治療には周到な注意を払いとくにクロロホルム麻酔による手術に当つては、その脈をはかり、緩厳度を失わぬよう戒めていた。

明治5年に『黴毒新論』を鹿児島病院から出版している。その中に水銀剤の乱用を戒めている。その頃、梅毒治療のための性病院、ハンセン氏病の隔離病院の設立を訴え、貧者のための病院を社会的寄附によって設立すべきであると説

いた。また、病院職員の待遇改善を要望している。明治7年には征台の役で鹿児島から出征した将卒でマラリアに罹り帰還した多数の患者をウィリスが治療して全治せしめている。

ウィリスは1875年（明治8年）3月、一年間の帰英に際し大山県令にこれまでの勤務を総括して報告している。（ヒュー・コータッチ「ある英人医師の幕末維新」から）

「西洋医学の指導にあたり私の尽力の成果、すくなくならず、またこの治療法がきわめて効果的であることが判明するにおよび当県民が私を信頼するにいたったことは満足のきわみであります。」

「今日まで当病院の処方箋に記載された外来・入院患者はすでに1万5千余名に達し、このほか往診により治療を施した在宅患者数は数千人におよびます。」

「右のように大勢の患者中には普通の疾病も創傷もあり、手術も小は手指の截去から大は大腿の切断まで行いました。このように当病院は学生の医学教育の場であると同時に病人にとっても有益な医療を受けられるところとなり、院名は日を追うにしたがって高まってきたのであります。」

「現在病院の各室には患者が充満し、医学校ならびに病院に出席する学生は150名であります。この学生の中には、近在出身者のほかに各県や各島から来たものも少なくありません。なお、最近県内の各地に支病院が新たに建設されました。」

「さらに医学指導の成果の例をあげるならば、さきごろ他県でも鹿児島のような病院を建設するために当病院の医師数名の招聘依頼があり、また旧学生で現在従軍軍医の高官に任ぜられたものもすくなくありません。」

翌1876年（明治9年）4月英国から鹿児島に帰ってきたウィリスは鹿児島を永住の地と決めたのであろうか、2階に4部屋、1階に6部屋のかなり広大な住宅の建築にとりかかり、医学校・病院の仕事はあいかわらず多忙をきわめた。

各地から新入生60名が医学校に入学してくることに今年度の医学校ならびに病院の学生および職員の総数は250名になる予定であった。ウィリスは平穏な気持ちで勤務生活を続けていた。明治10年1月27日、宮崎へ出かけ美しい景色の中で旅行中、西郷軍の部下が新政府の兵器庫へ乱入して軍需品を収奪したという緊急情報を受け取った。これが西南の役の発端となった。

これからまもなくウィリスは江戸駐在英国公使より日本政府は彼の国外退去を望んでいる旨を公式に伝達する退去勧告書を受けとる。

ウィリスは英国流の医学教育、診療に盡力したばかりでなく医学研修上屍体解剖の必要性を説き、また当時の鹿児島に於ける牛の死肉食用禁止などはじめ、具体的に酪農の方法を示しながら、食生活の改善に牛乳・バター・牛肉の使用をすすめる、また妊産婦の検診や上下水道、暗渠の完備した清潔な町づくりを提唱するなど公衆衛生ひいては予防医学的業績などには顕著なものがある。ウィリスは、かつて島津久光が東上の折建白書を奉呈したことがある。その中で彼は財政問題、教育問題や鉄道、郵便の開設の促進また宗教の自由を許すことなどをあげた。また日本の実情にもっとも適した政府の形態は「天皇を元首としてこれを貴族と平民を代表する二つの議院が補佐することである」と説いた。国家の発展にまで配慮していたのである。

ウィリスは鹿児島滞在中、明治4年藩士江夏十郎の娘八重子（21歳）と結婚し、男子アルバートをもうけ楽しく過ごしていたが、1877年（明治10年）西南の役が勃発したため家族とともに東京へ移住し、妻子を残して単身帰国した。1881年（明治14年）再び来日したが、今度はアルバート（当時8歳）のみを同伴して帰英した。これがウィリスと八重子そしてわが国との永遠の別離となった。来日してから通算20年の歳月が流れ、弱冠25歳で日本の土をふんだウィリスは、すでに44歳の壮年となっていた。

帰英した彼は1885年（明治18年）アルバートをロンドンに残して、シャムのバンコック英国公使館付医官として赴任した。上司は親友のアーネスト・サトウであった。滞在7年病を得て、1892年（明治25年）北アイルランドへ帰国した。1894年（明治27年）2月14日ファーマーナー州モニーンの家で閉塞性黄疸のため、波瀾の57歳の生涯を閉じた。ウィリスの墓は北アイルランド・ファーマーナー州のアイルランド王国との国境近くにあり、両親や兄弟とともに眠っている。

鹿児島では明治26年8月門人たちが恩師ウィリスの頌徳記念碑をたて、彼の徳をたたえたのであった。その頌徳碑は、前記の鹿児島西洋医学開講百年記念の時のウィリス・レリーフとともに現在鹿児島大学医学部構内に移されている。

ウィリスの妻八重子はウィリスと再び会うことなく昭和6年東京・麻布で81年にわたる波乱の生涯を閉じた。その墓は東京白金台の瑞聖寺内にあり、江夏家の人たちとともに眠っている。

ウィリスの子アルバートは英国からオーストラリアに移り、明治39年4月まぶたの母親を尋ねて来日し、横浜埠頭で劇的な再会をして日本に滞在し、関西で日本女性と結婚して二男一女をもうけ、日本に帰化して宇利有平を名乗り昭和

18年死亡している。西宮市に住むウィリスの孫たちは健在である。

鹿児島におけるウィリスの主宰した赤倉病院ならびに医学校は明治10年の西南の役でストップしたが、やがて鹿児島県立医学校となり鹿児島市立病院、鹿児島県立病院を経て現在鹿児島大学医学部へと継承されている。明治の初めに芽生えた近代西洋医学の流れは、こうして現在まで脈々と流れているのである。

北アイルランドの荒野に生れた勇敢な青年医師ウィリスこそは、弱冠25歳で幕末動乱の未知の国日本へやって来て、滞日16年、その間ヨーロッパ的な文化教養によって冷徹な科学精神をもって、英国医学を日本へ導入し、英国流の医学教育、診療をやって自らヒューマニズムを実践し、日本の医学の近代化に貢献した恩人である。